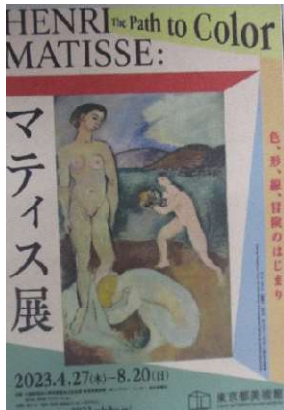


マティス展

東京都美術館（上野公園） 23. 04. 27～08. 20



「アンリ・マティス」(1869～1954)は、フランス 20 世紀を代表する画家で、自然をこよなく愛し緑あふれる世界を描き続け「色彩の魔術師」といわれ、フォーヴィスム(野獣派)のリーダー的存在で彫刻や版画も手がけている。

本展は、国内では 20 年ぶりとなる「マティスの大規模個展」で、パリ・ポンピドゥーセンターの所蔵作を中心に、国立近代美術館の収蔵品を加え、絵画のみだけでなく、彫刻、素描、版画、切り絵など「約 150 点」で、様々な素材を使い常に新しい作風に挑戦し続けた巨匠の制作のプロセスを追っている。

日本初の出品《**豪奢、静寂、逸楽**》(上図中)とその後サロンに出品した《**豪奢 I**》(上図左)が同時に展示されることで、野獣派に向かう作品とそこから新しい展開に向かう作品が同時に観賞できる希少な機会となることである。

作品《**豪奢**》についての解説は、「かしこには、ただ、秩序と美と豪奢と静寂と悦楽」ボードレールの『旅への誘い』に繰り返される誌の一節が画家を永遠の島へと導く。生きる悦楽(たのしさ)は、自然の淡い静寂(しじま)の中に現れ、裸身の女神たちの豪奢な集いの場に現れる。ふくよかな輪郭に生命の鼓動を響かせる、水から上がった無垢(むく)のヴィーナス。女神を装う妖精たちが、この場につくりだす美しい秩序。

《**大きな赤い室内**》1948 年 油彩/カンヴァス 上図右

伸びやかな線と色彩の画面は、画業の集大成の作品であるとされている。

画面は同じ平面にあるように見えるが、画家のアトリエの写真を見ると 2 点は 90 度の角度をなす二つの壁に掛けられている。従って、2 点の間の黒い線は、二つの黒い線は二つの壁の境ということになる。画面は抑揚のある赤で全体が覆われ、椅子や机の斜線を除くと限りなく平面である。初期から重要な主題であった室内画を通し、画業の集大成としての特質を遺憾なく示している。